いつになったら飛べますか

指守　要

いつになったら飛べますか

彼女の羽根は動かせない
神経が上手く通っていないのだ

恐らく相当の努力をしなければ
あの大空で風を切る事は出来ないだろう
そう言う宿命に生まれてしまったのだ

彼女は私に問う
いつになったら飛べますか、と

私は彼女に返す
希望を捨てずに居なさい、と

正直私にも分からないのだ

彼女が努力を捨てなければ
いつかその羽根は動くようになるだろう

しかし、動いたからと言って羽ばたける保障はない
空へ飛びたてても落ちるかもしれない
その事をいつ説明すべきか悩んでいる

彼女は羽根が動けば羽ばたけると思っているのだ
余り失望を与える事はしたくない

今日も彼女は私に問う
いつになったら飛べますか、と

私は答える
希望を捨てなければいつかは、と

泣き女

泣き女

あなたの代わりに私は泣く
私は泣く

手折った花が枯れる前に
雨の後の水たまりが乾く前に
あなたの悲しみが消える前に

私は泣く
私は泣く

空など見上げない
地面を見下ろすのが丁度いい
どちらにしても潤んだ瞳では
ぼやけて揺らいでうつるだけ

泣き女

あなたの悲しみが癒えたなら
私はそっと去りましょう

私は泣く
私は泣く

私は泣き女

カラス

その 黒い
その 黒い黒い 羽根を

わたしにも頂戴

どこまでも
飛んでいけるような

羽根を

その 黒い
その 黒い黒い羽根を

気流

空を見て思うことは、
僕はあんな所では生きられないな、と言うこと

酸素は薄くて
疲れても休める場所がなくて

何よりひとりきりだ

群れていないと不安になる若者のように
僕はいつでも傍に居てくれる人を探している

一時的だって分かっていてもやめられない
それは麻薬のようで

羽ばたくための翼もない

行くことが出来ないから否定しているのか
どっちにしろ無縁の場所だ
何も感じず地を這って生きていくしかない

もし、あそこへ行くことが出来たなら
たった一瞬でも風に乗ることが出来たなら

もう、生きていられなくたっていい

くる くる り

馬鹿みたいなことに付き合って
馬鹿みたいな感情に付き合って

私は何処

人のために押し殺した心は収拾が付かなくなっていて
私の身体を振り回してみんなを傷付けていく

押し殺した意味が無いくらい私はぐるぐると回り
手の先に付いたナイフでみんなを抉る

こんな事は望んでいなかったと言って
責任逃れが出来たらいいのに

衝突が恐くて私は私をなくしたのに
それが更なる衝突を起こしてしまうなんて知らなかった

私は回る
手を血に染めながら回る

行き着く先は何処

記憶

過去耳にした音が、声が、言葉が

今でもふいによぎっては私の心を締め付ける

最後の自傷

私に残された最後の自傷は

ピアスホールをあけることでした

膿んでボロボロになった耳

左側だけの私の抵抗

まだ　３つ

小さな理解

空から見た地上はあまりにちっぽけで
悩んでいた事もちっぽけに思えました

もうあそこへ戻る事はないけれど
今悩んでいる人たちに

この景色を見てもらいたい

理由

爪を噛むのは寂しいから
髪を切るのは変わりたいから

言葉を綴るのは
自分を見てあげたいから

爪を黒くするのは見て欲しいから
髪を染めるのは何か言って欲しいから

鏡は見ない

心のどろどろが溢れていて醜いの

感情麻痺

青空を見て何も感じることはない

当たり前になりすぎたものは
人の心を動かせない

散るものは美しい
儚いものは愛おしみたい

そんな事誰が決めたのだろう

当たり前のことまで愛せるようになって

初めて
それを感情と呼ぶことが出来るのではないか

強く、なりたい

屈することなく立ち向かえ

泣きたければ泣き
笑いたければ笑え

何事もあなたを責めはしない

愚かだと笑い飛ばしてしまえばいい
あなたは何があってもあなたでしかない

光が見える？

そこへ向かって少しずつでも進んで

足が止まってしまう事があっても
心だけはそこを見つめていて

それらは確実に強さへとなっていく

崩壊への一歩

どうして私に羽根を与えたのですか

飛ぶことを知らなければ
こんな気持ちになる事もなかった
こんな醜いものを見る事もなかった

地上は火で溢れていて
何もかもを飲み込もうとしている

地上は水で溢れていて
何もかもを洗い流そうとしている

去年まで花が咲くのを楽しみにしていた桜も
あなたと他愛もない話をした公園も何もかも

燃えてしまう
消えてしまう

羽ばたいている私だけを取り残して
破壊の続いている思い出

どうして私に羽根を与えたのですか

答えは

自愛

私は自分を汚したくて
消したくて
殺してしまいたくて

でも完全に出来る勇気がなくて
苦しんできたけれど

これは全部

自分を赦したい気持ちからだったんだ

過去となった気持ち

あなたから連絡してくることは
ないのだと分かっていても

わたしは待ってしまっている

季節の挨拶すらなくなってしまって

悲しさのあまり
あなたのアドレスを携帯から消した

もう、わたしから連絡は出来ない

来ないメールを待って
ずっと携帯を握りしめている

時の音

時計の秒針と砂時計の落ちる音

時は確実に進んでいる筈なのに

私は箱庭で足踏みを続けている

命令

腕をもがれ
足は腐り落ちた私に
羽が与えられた

前へ進めと言うのか
まだ生きなければならないのか

空は暗く周りが見えない

その中を飛んでいけと
あなたたちは言うのか

病状の進行と対向

大好きな歌を歌わなくなって
大好きな自傷をしなくなって

悪化したのか
改善されているのか

世間的に見たらきっとまだ
全然ダメなんだろうけど

それでも期待はしたいから

少しこのまま様子を目てみようと思う

夢

君の夢を見た
一人で泣いて、いた

私の言葉は届かなかった

現実の君も
泣いているのでしょうか

私の言葉も
届かないのでしょうか

どうかそんな事がありませんよう
君の心に寄り添って居られるよう

渇望

愛してるって言われても
ピンとこないの

ねえ、もっともっと愛して
私に分からせて

ねえ、愛してるって言ったのに
どうして離れていくの

私を愛してくれていたんじゃないの

あとがき

はじめまして、もしくはお久しぶりです。
作成者の指守です。

この本をチラッとでも見てくださってありがとうございます。

今回は「空」と「飛ぶこと」を中心に書いてみました。
何か書いていて若干しつこい気もしましたが、
テーマを決めないとどうもやりにくくって…。

サイトには載せていない書き下ろし多めです。
いくつかは今後サイトにも載せるかもしれません。

なので稀少性は余りないんですけど、
もし気に入ってくださった詩がひとつでもあれば、嬉しいです。

自分の言葉を愛していて、人からも愛せてもらえる事は、
とっても嬉しくて素敵な事だと思うのです。

次のテーマはまだ何も決めていないし、
どれくらい間を空けて書き始めるかも分からないので、
何とも言えませんが、また書く、と言う事は決まっています。

その時にはまた、よろしくお願いしますです。

あなたとの出会い、再会に最大限の感謝を。

写真・イラスト・文章：指守 要
サイトｕｒｌ：http://karaitoma.web.fc2.com/

いつになったら飛べますか

http://p.booklog.jp/book/97473

著者 : 指守 要
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/karaitoma/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/97473

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/97473

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ